

忍びの者 村山知義 理論社

小説国民文庫

忍 び の 者

©1963年 2 月 第九刷

定価 380 円

著 者 村 山 知 義

発行者 小 宮 山 量 平

東京都千代田区神田神保町一の64

発行所 株式会社 理 論 社

電話 東京 (291) 5668・9

振替口座 東京 95736

誠 和 印 刷

橋 本 製 本

忍びの者 目次

第一章 闇のさなか／5

第二章 水のほとり／61

第三章 ある決戦／98

第四章 ある暗殺／144

第五章 ある落城／189

第六章 黒い炎／234

第七章 血の光／275

あとがき／331





上・名張市竜口に現存する百地屋敷 下・伊賀上野市忍町

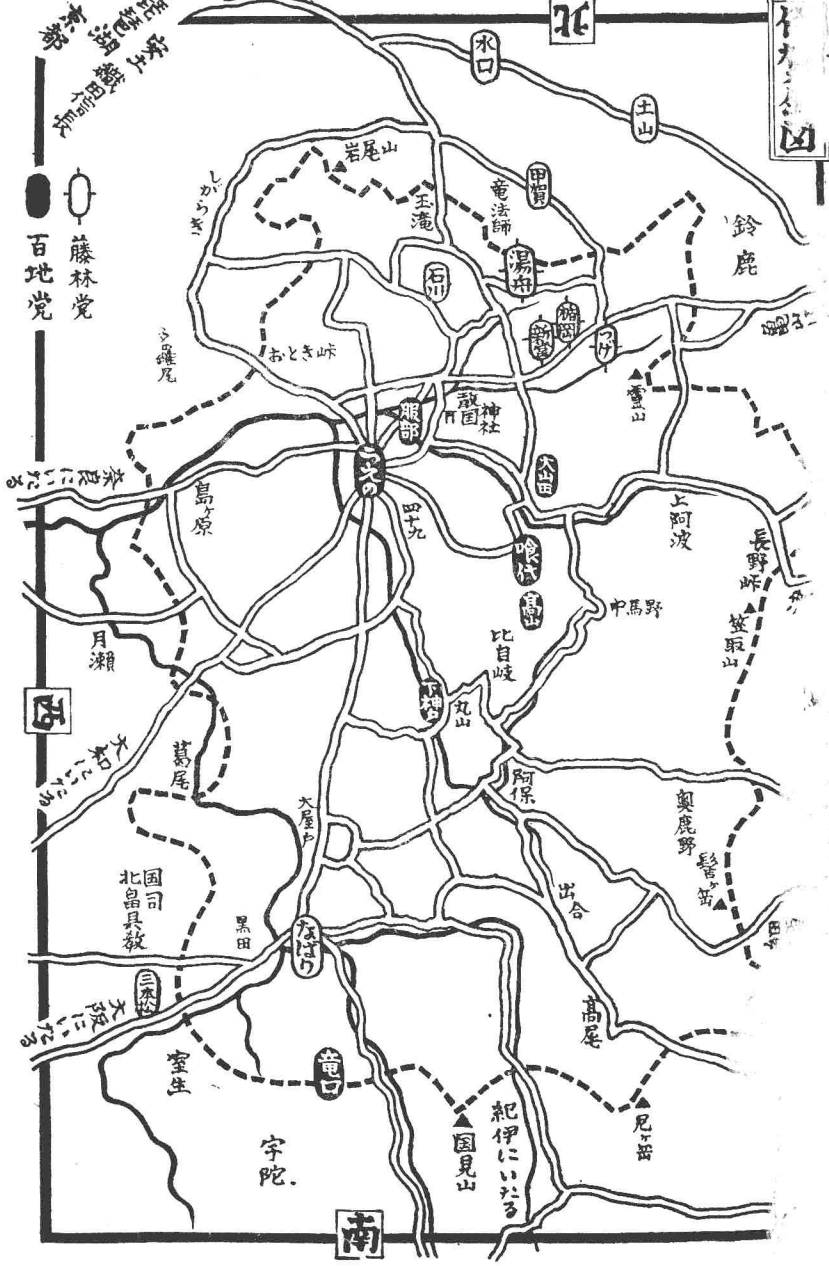
日本
山

北

南

東
西
南
北
東
西
南
北

藤林党
百地党





千方の砦にて作者

挿画・要図／村山知義

第一章 闇のさなか



峰々に囲まれたこの盆地の空気はジットリとよどんでいる。だから残暑のきびしい昼間の熱が、そのままま暖く生き残って、それをつんざいて走っているカシイの頬を、生き物に撫でられているような、気味のよくない感じで包んでいる。

月もなく、風もない。星さえない。

毛物の胎内でうごめいているような感じ——おれも生まれる前、母の胎内で、こんな感じを感じながら生きていた——おれは確かにそれを覚えて……だが、なぜ、親父は、カシイなどという名前をおれにつけたのだろう。生まれた百姓屋の、傾きかかった屋根をささえるみたいにして確かにこの地方では珍しいほど大きな榎の木が一本立っていた。それが大山田村のカシギの家の目じるしだった。カシギという親父の名前ならまだ意味がある。榎の木と解してもいいし、かしいだ家に住んでいる、という意味に取ってもいい。だが、カシイとは何だろう。榎の木があるから榎、それはわかる。親父の名前の二字を取った、それもいい。だが、イとは何だ？——別に変わった井戸があるわけでもなく、猪(いのしし)を狩って業としたこともない。してみれば、どうしてもカシ

下にくつつける字が考え出せなくて、イロハのイをくつつけたか、それさえ考えつかない間に、ただカシだけでは呼びにくいので、長く引っぱったのだ、としか思えないではないか。

無責任だ——ダラシがなさすぎる……

子供のころから、名前を呼ばれるごとに胸を刺すこの思いが、今も頭をもたげて来た。この思いは、彼の今はもういない父親に対する憤まん（げんまん）の念につながっていた。

彼に対して、一度もやさしい顔を見せたことのなかった父親。一生を下忍（げんじん）の下として暮らして、ついに少しの出世もしなかった父親。人通（じんたう）の術だけには人にぬきんでてすぐれていながら、その達人であることでなんの得も取らなかつた父親。カシイが十四の年に、別れを告げずに出て行って、それきり消息の絶えてしまった父親。恐らくどこぞの合戦に雇われて行って、討ち死にしたのだろうが、行跡一切不明のまま、この世から消え果ててしまった父親——。

その父親のいかにも脳みその少ないことを現わしているような三角にとがった頭と、ひからびた柿の種のような顔色と、その機能を果たせさえすればよいのだという

ようにくつつけられている目鼻とが目の前に浮かんて来た。せいも五尺そこそこ、手足には静脈がニョキニョキとはっている父親——それよりいくらかはましたが、結局は争われない、似た顔と姿を——カシイを常にやるせない気持ちにする粗末な顔と姿を無理矢理にカシイに伝えたまま、姿を消してしまった父親——。

抱いたとてどうにもならぬ憤まんである。だがそれがジクジクと噴き出してくる。身体の精気が抜けてゆくようないやな気分である——。

その途端に、うしろに蹴上げる脚を高くあげず、一刻（二時間）六里の速さで、なんの音も立てず、すべるように走っていた脚が、その脚の持主の命令もないのに、不意に歩度をゆるめた。

おや！ とカシイが、気がついて見ると、そこは、その前を通る時は、きつと立ち寄って参拝するきめになっている敢国神社（かんこくじんしゃ）の社前であった。

どんな闇夜だといっても、忍者の目には、うっすらと、物の姿形は見えるものである。いわんや小高い岡いっぱいに、杉の木立がびっしりとかたまっている神社の姿においておやである。

カシイは着物の土ぼこりを、ハタハタと払い落とすと、小腰をかがめて、鳥居をくぐり、石畳をすべって、石段を上がって行った。

伊賀一円の総鎮守で、一の宮大明神といわれ、少彦名命（のみこと）と金山姫（かなやまひめ）とお祭りしていると聞かされている。いつのころからか、伊賀の忍者たちは、この神社を自分たちの神社と定め、毎年十二月行なわれる柘植川（つげがわ）へ出御（しゅぎょ）のお祭りには、黒装束に身をかためて、供奉するならわしになっていた。

闇の中に一きわ黒々とした木立にかこまれた本殿は、いかにも物寂びで、古く朽ちている。いつものように、その前にぬかずくと、なにを祈るということもなく、すぐにきびすをかえた。そのときカシイの心は、いかにも空虚だった。憤まんは消え失せ、なんの感情もただよってはいなかった。

忍者たちは自分の心を虚（うつろ）にする修練を積んでいる。自分が虚になったとき、外からの刺激に、一番敏感に応えられるからだ。うつけもののような顔をしている時、忍者は一番鋭く生きているのだ。

そのカシイの、どの感覚がどう感じたか、ということ

はできない。ただ、ハツとする危機感があった。その瞬間に、カシイは、八方どちらに逃げる道も見出せぬまま、激しく頭上に跳び上がった。手を伸ばしたところに、横からかなりの杉の枝が出ているはずであった。なにかが、そこに枝があると教えたのだ。手は果たしてその枝をつかんだ。反動を利用して、クルリと身体を一転させ、上半身を枝にのせた。

その真下に黒い影が、キラリと光る物を両手を前に突き出しながら躍り出たが、し損じたと思うと、思い切りよく、はずみのついた脚でそのまま飛ぶように石段を駆け下りて行った。枝から跳び降りたカシイは、そのまま地面に伏して、右の耳を土に押しつけた。土を伝わってくる微かな足音は、たったいま、カシイが走って来た方角——北の方、佐那具（さなぐ）の方へ戻って行って消えた。

して見れば、これはカシイに先回りして、ここにひそんで待ち受けていた者であろう。故郷であるここいらには、待ち伏せしてカシイを刺さねばならぬ者がいるとは思われない。第一彼が上杉輝虎に雇われて、越中富山城に拠る一向一揆を偵察するために出向いていることを知っている者は、直接の頭である大山田のカスミのほか

ないはずだ。とすると、彼に殺された一向一揆軍のどれかの仇を討つために、富山から彼のあとをつけて来て、今ここで先回りして待ち伏せたものと思われる。

むろん、戦いが起こるとなれば、伊賀、甲賀の忍者たちは、敵味方を問わず、手を差し伸べて来た方へ雇われてゆく。今度の一向一揆方でも、だれかを雇っているものに相違ない。とすればだれだろう？

同じ忍びものにしても、歩き方走り方にしてからが、人ひとりひとりのくせがある。カシイは頭に浮かぶ限りのあれこれの顔を思い浮かべてみた。

土民であれば、仇をうつために、伊賀者、甲賀者に出す金を持つてはいまい。とすれば可成りの武将であろう。カシイは確かに六日前、城に忍び入って、部将らしいよろい武者の寝首を一つ掻いた。だがどこのだれやらわからぬ。

カシイの頼まれた仕事は富山城内の敵情偵察であって、武将の寝首を掻いたのは、恩賞目あての、その場の思いつきだった。

もともと、伊賀者は蛆虫のように考えられていたから、投げ与えられた恩賞が、予想を遙かに下回ってケチな金

額だったのにも、別に不平はなく、契約の金を受け取ると、ひと仕事済ませた気の楽さを味わいながら、別に急がぬ道を生まれ故郷へと向かったのであった。

越中富山から、飛騨の山々を越えて伊賀まで追って来ているながら、たった一度の襲撃であきらめてしまったところを見ると、あの男もなかなかの男らしい。

由來、忍者は、悪あがきをしてはならぬ。細心に、精神を込めて、絶好の機会をねらう。それに失敗したら、いさぎよくあきらめて、全く別の機会をねらうべきなのだ。あの男は、カシイがやっと生まれ故郷の守護神社に詣でてホッと、気が安んじた瞬間をねらったのだ。機会は一度去ったら、同じ一連の時の流れの中ではもう来ない、長い道中の苦勞などは、スッパリとあきらめたのだ。あのあきらめのすばやさ、只者でないことを示している。

「よしよし、今は思い当たらぬ。思い当たらぬならそれでよし。やがて、いつか、パツとした拍子に、思い当たる時があるものだ。忘れてしまうことだ」

そうカシイは思って、たちまち、その男のことは頭からすて去った。

夜気は相変わらずむし暑い。

寺田村で、服部川の木橋を目の前に見て、川に沿って東に曲がれば、大山田村は目と鼻である。

服部川を真ん中に、銀杏ぎんなんの実そっくりの、長さ一里に足らぬ小さな盆地——そこがカシイの生まれ故郷である。

小さな耕地しかないので、農民たちは麻を植えたり、キツネを狩ったり、養蚕をしたりして、努め励まなければ口を糊することができない。忍びのわざも、農耕だけでは食えない農民たちの、生活のための大事な余業だったのである。東端の岡の麓に、カシイの生家の目じるしの榎の木が黒々と見えて来た。やはりホツとしたものが、彼の胸を包む。だが、五カ月めに、遠い危険な旅から帰って来たというのに、よろこんで迎えてくれる人は一人もない。

しかし彼は、彼の属する組ちゆうぐみの中忍である叔父に帰着を告げねばならぬ。カシイはすでに灯を消し、閉ざしてある戸をホトホトとたたいた。

「叔父ご、カシイ帰って参りました。」

「裏からはいれ。」

叔父の声がした。

叔父はカスミという名で、カシイの父の二つ違いの弟である。同じ腹だというのに、カシギと違って、五尺七寸はあり、デブプリふとっている。ふとっているだけに、カシギよりは、どこかゆったりしたところがあるが、それも心持ち程度で、カシイはいまだかつて、この叔父から笑い顔を見せられた覚えがない。

中忍とはいいながら、配下といっては、血縁関係のものだけ、カシイを入れて五人の下忍を持っているだけとて、暮らしは決して楽でない。傾きかかった柱の上にのった屋根のワラは朽ちて、病犬の、ところまだらに毛のぬけた肌のような。

どんなに貧しいとはいっても、中忍の家——ただの農家とは、造りが少しは違う。

入口の戸ががん丈で、二重のかんぬきになっているばかりか、頭の上からのぞいて、戸の外の人をうかがったり、襲撃したりすることができるような、のぞき窓があり、梯子でそこへ登れるようになっていた。

土間は、もとカシギが住んでいたころには、人遁の術に使う犬や猿の小屋を置いたために、大きく作ったのだが、今はそれらが取り払われ、とっくにたき木になってしま

ったのでただガランと広過ぎる。その片すみから、かくし抜け穴が、裏手の林の中に通じているが、その入口の上には、ワラや桶が積んである。

真っ黒にいぶされて、柱も壁も黒一色に塗りつぶされている。その暗闇の中を、カスミの妹の子エテギが、むっくり起き上がり、手さぐりで、裏口の二重のかんぬきをあけた。

カシイがすべり込んで、あとをしめ、かんぬきを落とすと、エテギは火打石を打って、行灯あんどんに灯を入れた。

人遁の術というのは、動物を使って相手の気がそちらに移った瞬間にのがれ去る方法で、犬、猿、鳩などを使う。カシギはそのために犬を五匹、猿を四匹飼っていたが、カシギの消息が不明になって、日を経るとともに、犬も猿も目立って衰え始め、犬二匹、猿一匹が死んでしまったので、あとは野に放してしまった。エテギはその猿にちなんでつけられた名前だが、エテ公とは似ても似つかぬ子で、第一、大兵肥満である。由来、忍者に大兵肥満は禁物なのだが、カスミといい、エテギといい、一歳の誕生を迎えるころからムクムクと肥え始め、ほかにそういう体質の者のいない一族の者の眉をしかめさせた。

なるべく食を控えさせようとするのだが、三つ四つのころから、餓鬼のように食い、とうとうみなをあきらめさせてしまったのだ。

だからエテギはまだ十四歳なのに、たけはカスミに劣らず、目方は二十六貫あった。こんな身体では、しよせん、忍者にはなれないので、女気のないこの一家で、家事一切をまかされている。ただ、力は衆にすぐれ、棒と槍を使うことが得意だった。

カスミも忍術はうまくないが、人の腹中を読み、自分の思っていることの逆をいって人の心を操り、とぼけて人を惑乱させるなどの術にたけていた。カスミという名は、なにも長じてのちのこの性質を、親が予見して付けた名ではあるまいが、うまく適中したというべきであろう。

三人の顔が、灯油の灯で、闇の中に、ポツと浮き上がった。こうして見ると、やせひすばったのと、肥ったのとの違いはあれ、やはり争われぬ近い血縁の顔であった。いずれも、ごくお粗末な道具類である。目も鼻も口も、必要があるので、やむを得ず、穴があけてあるという具合である。

足を洗ったカシイは叔父の前に坐つて辞儀をし、腹巻のなかから布袋を引き出し、その中からサシにさした錢を取り出して、十本のうち八本を叔父に渡し、二本をまたもとにおさめた。

叔父はそれをなげしの上のかくし戸棚にしまうと、

「寝ろ。」

と一と言いつて、自分の臥床ふしどにもどつた。

いつものことである。出稼ぎから帰つて来ても、様子をたずねることはない。だが、その後、稲刈りなどしている途中で、ふと手をとめて、

「で、一向宗徒いこうしゆというのは、死ぬとき、なんといつて死ぬのか？」

などとたずねる。三つ四つ立て続けに質問すると、そのまま、また黙つてしまふ。きいたことを噛みしめて腹におさめているという具合だ。

だが、敢国神社あきくにでの襲撃の話をきいた時はその小さな目をカッと見開いて「ふーむ」とうなつた。

「上衫にやとわれて行っているのは、東湯舟ひがしゆふねの小一こいちだ。

鼻息が聞こえはせんんだか。」といった。

「そういうえば、とび出して来たとたんに、なにやら一と

息、クーツというような音が聞こえたが、あれは鼻息だったのですか？」

「クーツと聞こえたか。ならば小一にきまつたわ。エテギ、明日、東湯舟へ行つて、小一が家へ寄つたかどうかさぐつて来い。富山からここまで来たら、家に寄らんということはあるまい。あいつ、去年もらつた嫁にほれておるからな。」

さも軽べつしたというように大きな唾を吐きとばした。彼によれば、嫁をもらうのは、家事をさせるために、あるいはやむを得ないかも知れない、だが、女にほれてクヨクヨするとか、嫁をもらつてそれにほれているとかということは愚の骨頂だ。忍者の第一の条件に欠けているというのだ。

だから彼は五十四歳の今まで、ついに女に接したことがない。と、自分でもいい、人もそう信じているらしいが、実は、二十四、五のころ、鈴鹿の山中で、三度、農家の女を襲つたことがある。三度とも、女にいやしまれ、非常に具合が悪かつたらしく、その後はあきらめてしまったのだ。

十五年前に父のカシギが消息不明になり、一年たつて、

母も熱病で死んでしまうと、この叔父が川ッ端の小屋をたんで、この家に越して来た。カシイはそれからこの叔父を父のようにして、仕えることになり、したがって女についての、そういう考え方を吹き込まれ、嚴重に監督された。

しかしカシイは叔父のように、女に対して無関心でいることはできなかった。どころか並々以上の関心を持っているらしい自分をもてあましていた。

それが、叔父の目の下でいじけさせられ、二十八歳になる今日まで、女とはなんの交渉もなく過こしてしまつた。

女に心を引かれてはよい忍者になれぬ。だが女の心を知らないでは、くノ一の術をうまく使うことができない。ここにも忍術道の一つの矛盾があった。

くノ一というのは「女」という字を分解したもので、女を利用して、敵の内情をさぐる術のことを、くノ一の術というのだ。

女は忍者にはなれない。どんなに訓練したところで、筋肉も骨格もしょせん、男には及ばないし、その上、気持ちに變化が多い。ことに男にほれた時は、手がつけら

れなくなり、常軌を逸してしまうことが多い。だから女忍者というものはあり得ない。

ただ、男がころぶのは金と女である。したがって女を利用することはなはだ多い。

単独にほうっておくことはできないから、どうしても相談人が必要である。相談人は女に命令を与え、操縦し、監視し、連絡係をつとめる男のことだ。親か夫がその役をつとめるのが理想的だとされているほどだから、よほどよく女の心を知っているものでなければならぬ。

また、くノ一の術には、敵方の女で、内情をよく知っているものにねらいをつけ、いろいろの手段でうまく籠絡して敵の秘密をさぐり出す、という手もある。だが、これにいたれば、女というものをよく知らなければ、どうにもならぬ。

女の心を引きつけ、引きまわし、支配する——思うだけでも、目の眩むようなことだ。

女の手にさえ触れたことがなく、女とうまく口のきけたこともないカシイに、どうしてそんな大それたことができるよう。だが、夢想のなかではそれのできる忍者になりたかった。

たとえば、同じ大山田村内の真泥^{まどろ}に住むネジリのごときは、ちょっと締まった顔をしているというだけで、どこといって取柄のない人間だが、一たん女とつきあわせると、水を得た魚のごとくエンジンがかかり、生き生きと躍動し出す。そして、初めは彼を小馬鹿にしていた女たちが、みるみるうちに、心置きなく交際し出し、やがては手の内に丸めこまれ、笑わされ、泣かされたあげく、やがて弊履のように投げすてられてしまう。当座は泣いたり、恨んだりするが、やがては何のこともなかったように、友達づきあいをしている。

下忍ながら、この特技のためにネジリの評価はだんだんにあがり、上忍たちに重く用いられ始めている。ああできたら、さぞや愉快なことだろう。楽しい目を見ながら、しかも手柄を立てられる、こんなよいことはないではないか。カシイは羨望と嫉妬に苦しめられながら、ネジリの前には頭が上がらないのである。

カスミの前で、遠まわしにネジリのことをほめてみるのだが、カスミはいつも機嫌を損じて、

「ふん、あの下郎めが！」
と吐き捨てるのである。

そのカシイの、いって見れば荒涼たる感情生活に、たった一つ、あたたかい流れを流しこむものがあつた。

その名はタモ。

たもとのことを子供たちはタモといった。そこからとつた名前だろう。

この名を越中富山の旅の間、何度カシイは心でつぶやいたことだろう。この名を舌の上にのせると、上のとがった三角形の彼の頭は、あたたかい流れで、たちまちいっぱいになってしまうのだった。

帰った翌日にも彼はタモに会いに行きたかったのだが、その日はエテギが、東湯舟に小一りの消息をさぐりに行くことになっていたので、それをほっておいて行くわけにもいかず、畑仕事をして日を暮らした。

朝から出ていったエテギは夕方帰って来た。どうしらべて見ても、小一が帰って来た様子はないという。小一の家はご多聞にもれず、貧乏百姓で、門もかんぬきもない見通しの家だし、家の者たちは、いつもの通り野良働きをしていて、別に変わつたこともないし、そんな話もしていなかったという。

三日めの夕方、カシイはタモの家を訪ねた。服部川ぞ

いに二里下手の上野の東の町はずれに彼女の家はある。

それはカシイの家よりもっとかしいだ、はるかに小さい馬小屋といった方がよいような家だった。ここはそういう家ばかりが百戸近く寄り集まっているところで、馬や犬の皮革を扱う人々の住んでいるところである。

このあたりは、古く能の宝生流の祖先も住んでいたところで、むかし勸進能を興行したという勸進の辻という場所もあるが、カシイがタモに会いに、ここを訪ねて来た元龜三年（一五七二年）から数えて二百年も前に、服部氏の後えいだった観阿弥は一座をひきいて大和の結崎へ移って行き、その孫、世阿弥に至って、京都で足利將軍の寵を得たのである。

だが、音曲芸能などに全く縁のないカシイはそのようなことを知る由もない。ただ猿楽が盛んで、祭りの時など、いそがしげに立ち働いている人々のあることを、かすかに見知っているだけである。

カシイが近づくと、家の中から、

「カシイ、帰りなさんしたか？」

というしわがれた声が聞こえた。

「おおさ、おとつい帰ったわ。」

そう答えながら、カシイは中を見まわした。部屋の隅におかれた籠の中に、いっぱい蠅にたかれながら、赤ん坊が二人、スヤスヤと眠っている。

しわがれた声の主は、見たところ、五十に近いと思われる、せいもこんも働きつくしたというような女であるかぶった手拭の下から、もつれあった毛がモジャモジャと垂れている。

だが近寄ってよく見ると、若いころはさぞ美人だったろうと思われる整った顔立ちをしている。顔の諸道具の造作も、カシイのものとは格がちがう。

「たんともうけて来なさったろうに。」

「うんにゃ——大名たちも、いくさつづきで貧乏になったわえ。」

そして、がまんしようと思っても

「タモは？」ときかずにはいられなかった。

「いまそこらにおったが——どこへ行きくさったんじやろ？」

そこへ

「お帰りなさんし。」

といいながら、父親の箕太夫が畑から帰って来た。彼も